

想像界の生物相

ウリヤンハイのシャマンの依り代

ハンガリー科学アカデミー博士研究員 ショムファイ・ダーヴィド



資料名 依り代 (獣)
標本番号 H0205486
地域 モンゴル
サイズ 縦 41cm × 横 21 cm

◆◆◆ 獣がついた儀礼道具 ◆◆◆

みんぱくが所蔵するシャマンに関連した資料のなかに、一九九七年に収集されたアリグ・ウリヤンハイのシャマンが使っていた依り代とおぼしき道具オンゴン（複数形オンゴド）がある。アリグ・ウリヤンハイとは、フブスグル湖の東に住む人口三〇〇〇〇人ほどのモンゴルの一部族で、テュルク語族の言語を話すトゥバ人の子孫とされる。

研究者によってはオンゴンという名称を、「祖霊」やその「偶像」の意味で使う場合もあるが、じつは「偶像」ではなく、「聖なる」あるいは、「霊に守られた」というような意味のことばである。本稿ではシャマンが使う聖なる「儀礼の道具」という意味で使う。

オンゴンはマンジルガとよばれるリボン状のもので装飾されているが、本館の中央・北アジア展示場に展示されている右の写真の資料では、そこに動物らしきものもふらさがっている。わたしは、これはおそらく「ケル・ジュトパ」とテュルク系の人びとによばれる動物ではないかと考えている。西シベリアのバラバ・タタール人のシャマンの太鼓にも描かれることがあり、また、南シベリアのハカス人、アルタイ・キジ人、トゥバ人も同様のモチーフを描く。これに似たオンゴン

を、アルタイのテレンギット人が使っている写真も残っている。

◆◆◆ 地下世界の妖獣 ◆◆◆

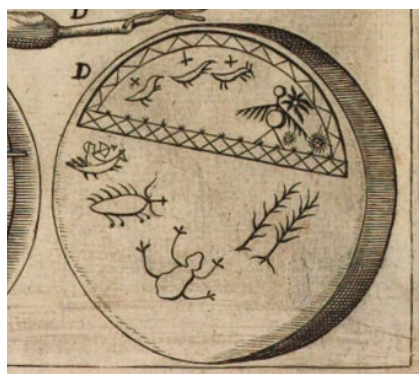
南シベリアのテュルク系民族の民話には、ケル・ジュトパという妖獣や、ケル・バリクという妖魚が登場し、それは足のあるクジラのような生きものとされる。地下世界に棲み、その背に人間が住む「真ん中の世界」を担いでいる。二匹いるともいわれる。そして、この獣が動くとき地震が起こるとされる。このような南シベリアの伝承が、ウリヤンハイのシャマンの儀礼とも関連しているのであろう。

蛇、鳥、怪物などの神秘的な生きものは、シャマンが天上世界と地下世界を行きかう旅の行程の象徴とされる。それを示す西シベリアのバラバ草原で収集されたシャマンの太鼓を見てみよう。一八世紀前半にピョートル大帝の許可を得てシベリアの調査をした、ドイツ人医師のダニエル・ゴットリーブ・メッサーシュミットによって収集されたもので、一緒に調査をしたスウェーデン人の軍人フォン・シュトラールンベルクが後にまとめた報告書にその絵が載っている。天上世界と地下世界をつなぐ聖なる木があり、天空をあ

らわす上部には「三頭の鹿」の星座（オリオン座）が描かれている。そして地下世界には聖なるカエルのほか、不思議な生きものが描かれている。この生きものがケル・ジュトパであることを、ハンガリーの研究者アイトセギ・ヴィルモシュがつきとめている。これは、ウリヤンハイのシャマンの儀礼が、テュルク系の伝承とつながっていることを示す証拠でもある。

このように、一九世紀以降にモンゴル語族の言語を話すようになった民族でも、テュルク系、ツングース系のルーツをもつ場合があるので、「モンゴルのシャマニズム」と一言でいっても、その歴史はじつに複雑なのである。

（翻訳・山中由里子）



西シベリアのシャマンの太鼓。カエルの左隣に描かれているのがケル・ジュトパ
出典：Philipp Johann von Strahlenberg (1730), *Das Nord- und Ostliche Theil von Europa und Asia*, Tab VI.